

■観光地経営の視点と実践 最新刊

観光地の持続的発展にとって、今や「観光地を経営する」という地域マネジメントの考え方が重要。本テキストは、既存観光地の現場で日々努力し、活躍されている方々が主な対象。「観光地経営」を一定の方針（ビジョン）に基づいて、観光地を構成するさまざまな経営資源、推進主体をマネジメントするための一連の組織的活動」と定義し、八つの視点と十の実践例について、その考え方や展開手法を解説。当財団調査研究専門機関化五〇周年記念事業の一環として発行。二〇一三年十二月発行（丸善出版）



■美しき日本 旅の風光 最新刊

調査研究専門機関として五〇周年を迎えたことを期に、当財団が長年取り組んできた「日本における観光資源の評価に関する研究」の成果を基に監修。北海道から沖縄までをエリアごとにまとめ、風景だけでなく、伝統文化、神社仏閣、温泉、街、食、祭り、芸能など、いまでも残しておきたい日本の大切な資源として紹介。完全英語訳付きで海外の方にも広く日本の観光資源の魅力をお伝えできる二冊。二〇一四年五月発行（JTBパブリッシング）



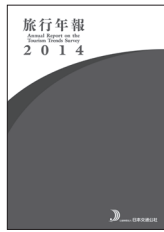
■平成25年度観光実践講座 講義録 最新刊

オバクに学ぶ「観光まちづくりの理論と実践」地域活性化の秘訣、課題解決のヒント！当財団が主催している二日間の講座講義録。今回は観光まちづくりの効果的・実践的な手法として大きな広がりを見せている「オンパク」に着目。オンパク仕掛け人の鶴田浩郎氏はじめ、各地で活躍する方々による事例紹介から実践的な考え方やノウハウに触れ、持続可能な観光地づくりのヒントを習得できる二冊。二〇一四年六月発行。



■旅行年報2014 リニューアル創刊

「旅行者動向*」と一体化し、リニューアル創刊。内容を充実し、旅行者、観光産業、地域、観光政策、それぞれについて直近一年の動向を分析、出来事を総覧。訪日外国人の発地調査、都道府県別の政策アンケート調査など新たに独自調査も増やし、引き続き当財団の研究者が分析、執筆、編集。旅行・観光の現状を多面的に一望できる二冊。二〇一四年十月発行。
*当財団独自調査に基づく日本人の旅行者の意識と行動を分析したレポート。



※当財団出版物の注文はホームページからお願いします。
担当：公益財団法人日本交通公社 観光研究情報室
電話 03-562556073 <http://www.jtb.or.jp>

次号予告

●地域の観光推進組織や事業者などが主体となった観光プログラム開発の取り組みは各地で行われています。これにより、まちあるきや農業体験、自然ガイドツアーといった地域資源を活かしたさまざまな観光プログラムが作られるようになりつつありますが、流通・販売面ではまだまだ課題が散見される現状です。次号特集では、地域側の視点から観光プログラムの流通・販売における課題を浮き彫りにした上で、流通・販売を促進するための手掛かりを探ります。

当財団からのお知らせ

「2014年度シンポジウム・セミナーのご案内」

当財団主催の今年度シンポジウム・セミナー実施・予定についてご案内します。

●第二十四回 旅行動向シンポジウム

二〇一四年十一月五日（水）
会場：大手町サウスカイルーム（東京・大手町 朝日生命大手町ビル内）

今回から内容をリニューアルします。

第一部 直近二年間の旅行市場観光産業国内観光地観光政策の動向と、今後の展望について解説します。

第二部 分科会形式で、当財団の自主研究活動を中心とした研究発表とディスカッションを行います。

参加費は無料とさせていただきます。皆様のご参加をお待ちしています。最新情報内容の詳細については準備ができた第1ホームページでご案内させていただきます。

当財団ホームページ URL: <http://www.jtb.or.jp> トップページ

「研究員コラムの紹介」(二〇一四年六月〜八月)

行く先々を見て触れて、そして地元の人たちと語り、感じたこと。世相のなかに見た観光の未来像など、各研究員が独自の経験と視点に基づいて、ホットな雑感を綴ります。当財団ホームページ「研究員コラム」に掲載した三ヶ月分をご紹介します。研究員コラム一覽で検索できます。

- 215 観光振興と定住人口との関係 (山田雄一)
- 216 歩きたくなるロングトレイルとは (吉谷地裕)
- 217 オンパクに学ぶ「観光まちづくりの理論と実践」 (吉澤清良)
- 218 平成25年度観光実践講座より (渡邊智彦)
- 219 訪日外国人旅行者を地方に呼び込む (相澤美穂子)
- 220 未来に残したい「日本の祭り」 (大隅一志)
- 221 変わらない地域の魅力、変わるその光の当て方 (柿島あかね)

編集後記

◆日本全国に多くの温泉地があり、昔から温泉という自然資産を日本人は上手に利用してきました。昨今は訪日外国人にも人気です。野生の猿が雪降る長野の山間の温泉に目をつぶってのんびりつかっている様子に、眺めている私たちも癒やされています。温泉の効能が心身ともにあることが分かります。

◆「温泉まちづくり研究会」の皆様の声から、温泉がどのようにまちづくりや地域の活性化につながるか、地元を良くしたいという思い、パッションが伝わってきました。何を変わらない「不易」とするかを温泉地の人々が話し、共有し合うことが大切であり、その不易を基調として、時代に応じて変化する「流行」が生きてくると語られました。

◆温泉旅館の相互連携から始まり、地域の産業や住民、行政との連携へと広げ、地域全体を活気づけようとする方向に、地域の方のベクトルを向けることが肝要であると分かりました。日本各地の温泉（地）がそれぞれの優位性を発揮して持続するためのヒントがあったのではないのでしょうか。日本の誇りである全国津々浦々の温泉（地）が永くあり続けてほしいと思います。

◆当研究会では、温泉地・温泉旅館のあり方について、いろいろな角度から考えてきました。多くの方々情報共有していただくことをコンセプトとしてコンテンツを整理しています。熱い議論の様子ホームページでご覧になれます。(片桐)

観光文化編集室メールアドレス:

kankoubunka@jtb.or.jp